

「鏡」論を掘り下げる―温かみを醸し出す研究を―

早稲田大学高等学院 相沢毅彦

【1.はじめに】

□最初に、この夏期研究集会での私の発表の告知として「村上春樹『鏡』および『街と不確かな壁』について」とあり、この発表をお引き受けした時点では、「鏡」と『街とその不確かな壁』とを結びつけて考えてみようと思っていましたが、うまくいかなかったので、今回、「鏡」についてのみ扱いたいと思います。まずは、そのことについて、お詫び申し上げます。

□それでは、「鏡」について、どのような話か見ていきたいと思いますが、まず初めに、扱う本文について指摘しておきたいと思います。知っている方も多いかと思いますが、「鏡」は何度も書き直されていて、細かなところで異同がありますが、本質的な部分は、共通しており、どのバージョンで読まれている方にも、話は通じるかと思っています。ここでは『村上春樹全作品 1979～1989⑤短篇集Ⅱ』という書物に掲載されているものを扱います。

□それでは、具体的な内容について見ていきたいと思います。少し長いですが、後々の問題意識とつなげるために話の流れを追っていききたいと思います。

【直接「語られた出来事」の流れ】

□この作品の冒頭は「さっきからずっとみんなの体験談を聞いてるとね、そういったタイプの話にはいくつかのパターンがあるんじゃないかって気がするんだよ」となっており、「僕」という「一人称」の「語り手」が、作品内の「聞き手」である「みんな」に向かって話をするという形になっています。

□「僕」が話をする前にはすでに「みんな」が「順番にそれぞれ怖い体験談」を話しており、場を閉じる最後に、そうした場を設けた「ホスト」としての「僕」が「たったの一度だけ、心の底から怖いと思ったこと」についての話をするというものです。

□冒頭付近に「僕はもう三十何年生きているけれど、幽霊なんて一度もみたことがない」とありますから、その体験を話している「僕」は「30何歳か」ということが分かり、

□語られた体験談の中に「だって十八、十九の頃なんてまったく怖いもの知らずだもんね」とありますから、語られている体験談は18、19歳の頃だということが分かります。

□すなわち、「30何歳かの「僕」が「18、19歳の「僕」がした「怖い体験」とその話をするための「前置き」を「みんな」に向かって話しているということになるかと思っています。

□また、「僕」が高校を出たのは六〇年代末の例の一連紛争の頃でね、なにかといえば体制打破という時代だった」とありますから、「怖い体験」が語られているのは1960年代末から1970年頃、語っているのは1980年前半頃になり、

□この話を聞いている「みんな」は1960年末の紛争について「なにかといえば体制打破という時代だった」という説明が必要なことから、「僕」よりは歳下であると思われる。

□こうしたことを踏まえた上で、では語り手の「僕」は具体的にどのような話を「みんな」に向かってしているのでしょうか。

□語り手の「僕」は話の「前置き」で「みんな」の恐怖体験は大きく分けると二つに分類できると言います。一つは幽霊のように「こちらに生の世界があって、あちらに死の世界があって、それが何かの力によってクロスするタイプの話」、もう一つは予知とかといった「三次元的な常識を超えたある種の現象や能力が存在する」話、

□その上で「みんなどちらか一方の分野だけを集中して経験しているような気がする」と指摘し、そうした体験が「個人的な傾向」を持っており、それぞれの主体に応じて体験されるもの、すなわち、あたかも個人的なバイアスがかかった現象であるかのように、「僕」によってシニカルな形で示されているように思います。

□その一方で、「僕」は、そのどちらにも属さない人として自分自身を位置付け、まるでバイアスがかかった見方

とは無縁であるかのように、「幽霊」や「予知」とは無縁な「散文的な人生」であると述べます。

□しかし、そんな「僕」でも、十数年前に一度だけ、「これまで誰にも話したことはない」、心の底から怖いと思ったことがあり、その内容が18、19歳の時の体験となります。

□体制打破の時代の波に呑み込まれた「僕」は大学に進むことを拒否し、何年間か肉体労働をしながら日本中をさまよっていましたが、その恐怖体験は放浪二年目の秋に新潟の小さな町の中学校で夜警の仕事をしていた時に起こりました。「僕」は夜中の9時と3時に校舎を見回る必要があり、その日、9時に見回った時には何も起こりませんでした。3時の見回りのために目覚まし時計が鳴った際には「体が起きようとする「僕」の意志を押しとどめるような感じ」がしています。それでも「意を決して」見回りに行き、校舎を回ることになりますが、最後のチェック・ポイントの確認を終え、玄関の下駄箱の横の壁のあたりを見た時、「何かの姿」が見えたような気がし、一瞬、わきの下がひやっとしますが、気を取り直してよくみると、そこには「鏡」があり、そこに僕の姿が写っていただけということが分かります。しかし、しばらくの間、タバコを吸いながら鏡に映った僕の姿を眺めていると、奇妙なことに気づきます。

□その箇所をそのまま引用すると

つまり、鏡の中の像は僕じゃないんだ。いや、外見はすっかり僕なんだよ。それは間違いないんだ。でも、それは絶対に僕じゃないんだ。僕にはそれが本能的にわかったんだ。いや、正確に言えばそれはもちろん僕なんだ。でもそれは僕以外の僕なんだ。それは僕がそうあるべきではない形での僕なんだ。

とあり、さらにその「鏡の中の僕」は「心の底から僕を憎んでいる」ことが理解でき、「まるで真っ暗な海に浮かんだ固い氷山のような憎しみだった」と「僕」は語ります。

□僕はしばらくのあいだ呆然と立ちすくんでいましたが、僕の体は金縛りになったみたいに動かなくなり、やがて「鏡の中の僕」の方が僕を支配しようとする、僕は最後の力をふりしぼって鏡に向かって木刀を投げつけ、鏡が割れる音がした後、走って部屋まで駆け込み、朝を迎えます。

□再び玄関に行ってみると煙草の吸殻と木刀が落ちていましたが、鏡はなく、「そんなのもともなかったんだよ」と30何歳の僕は意味付けます。

□その上で「僕が見たのは僕自身」であり、「人間にとって、自分自身以上に怖いものがこの世にあるだろうか」と指摘し、幽霊のような体験ではないが、恐怖体験には違いないことを指摘した上で、この家に鏡が一枚もないことを最後に指摘して終わるような話になっているかと思えます。

【「鏡」のポイント】

□以上が大まかな「鏡」の流れかと思えますが、この話のポイントは幾つかあると思うので順にそれらを指摘していきたいと思えます。

□まず、夜中に出現した「鏡」はあったのか、なかったのか、ということがあげられるかと思えます。

□語り手の「僕」は「そんなのもともなかったんだよ」と最後に語りますが、夜中に「鏡」が出現したものと語っていたことと矛盾が生じます。

□すなわち、18、19歳の時の僕が「確かに」夜中に鏡が出現する体験をしていたはずにもかかわらず（つまり、それがなければこの体験をそもそも語れないこととなりますから）、30何歳の僕にとっては「鏡」は最初からなかったものとして解釈しているということとなります。

□次に、「鏡の中の僕」は何なのか、ということです。すなわち、外見はすっかり僕でありながら、それは絶対に僕じゃない僕、仮にそういうものが存在し得るとしたらどのような原理で存在するのかということが問題となるかと思えます。

□加えて、「鏡の中の僕」は18、19歳の時の僕の何をそんなに憎んでいるのか、ということがあげられるかと思えます。

□これらの問いを考えようとした際、語り手の「僕」の位相（レベル）だけで考えても、出口は見えて来ないでしょう。

□なぜなら、かつての18、19歳の自分に起きた出来事がどのようなものであったか、語り手の「僕」自身も見えていないからです。

□具体的に指摘すると、語り手の僕は自分のことを「散文的な人生」と述べますが、物理的なものであるかのように見えた「鏡」が夜中に現象している時点で、すでに「散文的な人生」とは言えないにも関わらず、そう自分を分析してしまっています。

□あるいは先行研究では、実際には夜中に鏡は出現していなかったとする論が大半ですから、仮にその指摘だけでは不十分だったとしても、「前置き」のところで「虫の知らせ」とは無縁だと語っていながら、鏡が出現した日の夜中の3時の目覚まし時計が鳴った際には「虫の知らせ」と思われるような「起きたくない」という体験をしています。

□また、夜中に出現した鏡はないはずのところから突然出現する鏡ですから、いつどこで出現するか分からないものですが、「僕」は「家に一枚も鏡を置かない」という無意味な方法で対処しようとしています。

□すなわち、これらのことで何がいたいかと言えば、語り手の「僕」自身がかつて18、19歳の時に何が起こったか分かっていたかただけでなく、それから十数年経った30何歳になった今でも、その時、何が起こったかを相対化できていないということになります。

□そのため、先に指摘したようにこの語り手の「僕」の位相をいくら読んでも問題が見えて来ないということになるかと思えます。

□では、どうすればいいのか。そのためにはこの話を語っているが、しかし、何が起きているのか分かっていないような「僕」を、敢えてそういう語り手として設定した〈機能としての語り手〉の領域を読む必要があると思われまふ。

□言い換えると、敢えて、そうした何事が起こったのか理解していない「語り手」を「語り手」として設定して語らせることで、「聞き手」に謎や矛盾を喚起させ、その謎を解いてもらうことによって、あるいは矛盾を解消する形で直接語られていない、間接的なメッセージを受け取らせるという仕掛けを仕掛けている〈機能としての語り手〉の領域を意識的に読もうということです。

□そうした意識の元で、先の鏡は有ったのか無かったのかという謎を〈機能としての語り手〉による意図的なものだと考えると、私たちはそれを積極的に解く必要があるということが意識されてくるかと思えます。

□そうした場合、鏡が存在したのか、しなかったのかという謎は通常の世界観では解けないものだということが了解されるかと思えます。

□つまり、私たちの「通俗的な世界観」では、夜中に存在したものが朝になると消えていた、ということはありません。むしろ、夜中に鏡が出現したとされる場所には朝になってみると木刀と煙草の吸殻はそのままになっているように語られることで、その痕跡がなくなるほど綺麗に鏡の破片だけが消えていることが不自然なように語られていますし、夜中に出現した鏡には街灯の光が入ってきているものとしても語られていることから、確かに物質的な「鏡」が出現したものとして語られているように見えます。

□では、この矛盾をどのように考えたらいいのでしょうか。

□それはある主体に現象したものとしての対象は、その主体の認識の枠組みによって捉えられたものに過ぎず、また私たちは認識の枠組みを通さずに対象を捉えることはできませんから、認識の枠組みを通さない形での〈対象そのもの〉は了解不能だという世界観への転換が要請されていると考えます。

□すなわち、今述べたことは、第一項としての主体と、第二項としての主体に捉えられた客体（現象）、そして第三項目として主体によっては捉えられない〈客体そのもの〉という、三項で世界を捉えようという第三項論的な世界観への転換を促しているように思えます。

□なお、この第三項論はこの後、11時5分から話をして下さる予定の田中実さんの提唱された理論であり、その

考えをお借りしています。

□そのように考えた場合、例えば夜中に現象した鏡は、18、19歳の僕という主体によって夜中に捉えられた鏡であり、また、朝になると鏡が消えていたというのは、18,19歳の僕という主体にとっては鏡が現象しないものとして現象したということになります。すなわち、夜中には鏡が存在するものとして現象し、朝には不在のものとして現象したということになるかと思えます。

□では、僕という主体を超えて純粋客観的実在としての鏡は有ったのかなかったのか、ということが問われることになるかと思えますが、私たちは何かを認識する際、みな認識の枠組みを通さざるを得ないため対象そのものとしての鏡は了解不能ということになるかと思えます。

□補足しておく、では僕ではない主体、その主体を主体 B とすると、仮に主体 B が「僕」と同一空間同一時間に存在したとして、僕と主体 B の双方にとって鏡が見えていたとすれば鏡が存在していたとしていいかと言えば、主体 B もまた認識の枠組みを通していますから、それもまた主体 B の認識の枠組みで捉えた鏡に過ぎないということになり、原理上それが何人に増えたとしても、それが純粋客観的実在だということは言えなくなるということになります。

□つまり、そこから見えてくることは私たちは純粋客観的実在を把握できない世界の中で生きているという帰結がここから導き出されてくることになります。

□なお、こうした問題は「前置き」においてすでに語られていました。具体的には僕が「2人の友達と一緒にエレベーターに乗っていて、彼らが幽霊を見ていながら、僕はまったく気づかなかった」というエピソードです。僕の友人は2人ともグレーのスーツを着た女が僕のわきに立っていたと言いますが、「女なんて絶対に乗ってなかったんだ。我々3人きりだった。」と僕は認識し、2人の友達にとってはグレーのスーツを着た女が現象し、2人にとってはエレベーターに乗っていたのは合計4人、僕にとっては2人の友達しか現象していないため3人、ではどちらが事実かと言えば、それを判定することはできず、「僕」がどれだけ「嘘じゃないよ。」と言ったところで、それは「僕」にとっての真実に過ぎないということになります。

【「僕以外の僕」とは何か】

□次に二つ目の問題に移りますが、

□そのような世界観に転換すると次の「僕以外の僕」とは何なのか、というのも同様な原理を用いると見えてくるように思います。

□すなわち、僕という存在も、僕という主体が、僕の認識の枠組みで僕という対象を捉えようとした時、「僕によって認識された僕」と「了解不能の対象そのものとしての僕」とに分けて考えることができるかと思えます。

□とすると、認識対象が自分自身であっても、自分という主体には捉えられない自分が存在することになり、僕にとって思ってもみなかったような僕が僕の中に存在していたとしてもおかしくないということになります。

□まさに、「僕じゃない僕」「僕以外の僕」というのは、僕の中にありながら、僕としては通常、認識されていない僕の一部が認識できる形として現れたものということが言えるかと思えます。

【「僕以外の僕」が憎んでいるもの】

□ではそのような「僕以外の僕」「鏡の中の僕」が「鏡の外の僕」の何を憎んでいるのかと考えた場合、ヒントとなるのは、「鏡の中の僕」は僕によっては普段捉えていない領域のものとしてありますから、自意識の外のものとして探す必要があるかと思えます。

□その際、聞き手の想像によってのみそれを考えようとしてしまうと作品を読んだことにはならないと思われるので、私の場合、可能な限り作品のなかでまず探っていこうと考えます。

□そうした際、冒頭から続く「前置き」の語り、僕自身の自意識としては「実に散文的な人生だ」となっていることに気付かされます。30何歳かの僕の人生全般が散文的な人生だという自意識を持っているということは、18,19の時の僕にとっても散文的な人生だったという自意識となるはずであり、もしそうだとすると「散文的な人生だ」と思っている僕に対して、まさに夜中に鏡が出現するという超常現象的な形で僕が「非散文的な人生」

であることを「鏡の中の僕」が訴えているということが見えてきます。

□また、そうした訴えは先ほど述べた、この作品と通底する世界観とも繋がってくるように思われます。

□すなわち、先の鏡の有無や「僕以外の僕」とは何かという問題を考えた際に、対象そのものを了解不能としましたが、だとするとこの世界は、対象と考えられるものは無数に存在しますから、主体には思ってもみなかったような対象そのものとしての了解不能性に満ちている、むしろ了解していると思われるものはこの世界のほんの一部ということにもなるかと思えます。それほど訳の分からないものに囲まれて暮らしている私たちにもかわらず、人生が散文的、すなわち、「不思議なことなど起こらない」と考える僕は、〈機能としての語り手〉の位相から見ると、「鏡の中の僕」から憎まれても仕方のないものとして浮かび上がってくるものであると思われます。

□また、もう一つ自意識の僕が捉えられない問題として、60年代末の紛争の波に呑み込まれたことで、僕本来の生き方が阻害されてしまったことが考えられます。

□この問題としては二つの側面から論じたいと思います。まず一つは流行の波に呑み込まれるような人生の選択をしてしまったこと、すなわち、それは自己が本来的に求めていたものというよりは、大学に進学する能力がありながらそれを拒否し、当時、反体制派によって美化されていた肉体労働者としての選択を、(本来的な欲求として選び取ることであれば問題はないと思いますが)体制打破という時代状況に合わせる形で、いわば時代によって選び取られる形で、その方向へ進んでいったということが「鏡の中の僕」に憎まれなければならなかった理由として考えられます。

□もう一つの側面としては60年代末の紛争ということからポストモダニズムへの無批判な傾倒ということも考えられます。60年代末の紛争の発端は1966年11月のストラスブールの学生蜂起と見る説があるように、一つ目の大学進学拒否の問題とも関わりますが、それは教授位階性への反抗から始まったものであり、すべての権威や権力の解体、芸術作品であれば「カノン批判」「正典批判」の萌芽がこの頃、顕著に見られるようになったかと思えます。(なお、それは今でもポストモダニストの間で続いているように思えます)

□それを象徴するものとして、1968年にロラン・バルトが「作者の死」を提出し、作者の権威の解体を試み、1971年には「作品からテキストへ」などによって、実体論から関係論への転換点を確認することができます。また、1967年にはデリダの『グラマトロジーについて』、『エクリチュールと差異』、『声と現象』が出版され、脱構築の思想、すなわち、垂直方向のものを水平方向へとズラし、解体するというような思想がこの頃、広がっていくこととなります。

□こうしたポストモダニズムはそれまであったマルクス主義的な反映論ないし実体論的世界観から、関係論へと歩を進めますが、それと同時に垂直方向を水平方向へと組み替えていく運動のため、最も上層にある超越性までも排除することとなります。

□そのことが「鏡」の問題とどう繋がるかという点、先に指摘した「対象そのもの」の「了解不能性」は主体によって捉えられないものとしてある以上、主体にとって超越性に該当することとなります。

□すなわち、ポストモダニズムに呑み込まれるということは、当人が自覚しているかどうかは別として超越性を否定する立場に身を置くことに繋がります。

□だとすると超越的なものとしての了解不能性を認める「鏡の中の僕」が超越性を否定する「僕」を憎んだとしても不思議ではないように思えます。

□なお、ここでは詳しくは述べませんが、以前、私は「村上春樹「ささやかな時計の死」論—重層化された思い出し—」という文章で、村上春樹の作品がモダニズム、ポストモダニズム双方の批判となっていることを述べ、「超越とポストモダン」という文章では、ポストモダニズムが超越を忌避することを論じました。

□また、これまで「何を」「鏡の中の僕」は憎んでいるのか、ということ論じましたが、以前、「なぜ」憎んでいるのか、という質問を受けたことがありましたので、そのことについても考えてみたいと思います。

□その答えを端的に答えるならば、「鏡の中の僕」が「僕」によって、自らの存在が否定されているが故にこれほどまでに「僕」のことを憎んでいるのだらうと考えます。

□「憎しみ」を引き起こすものの中でも最も強いものの一つは「その存在を否定される」ことであるように思えます。

□例えば、トマス・アクィナスは神の本質は「存在」だと言っていますが、そこから神の本質を分有しているとされる人間の本质も存在だと考えられます。すなわち、人間にとって、その存在を否定されることが最も本質的な部分を否定されることとなり、それが故にそれをされることが最も強く憎まれるべき事柄であると言えるかと思えます。

□もう少し詰めて考えるならば、超常現象を認めない「散文的な僕」が、超常現象を認める「非散文的な僕」になったとすると、同じ僕という姿形をしていたとしても、その中身、「散文的な僕」と自覚していた僕は消失することになります。すなわち、より強い言葉で表現すれば「散文的だと思っていた僕」が「死ぬ」ことになるかと思えますが、ここでは相手の存在を認めるか（自分が死ぬか）、こちらの存在を認めさせるか（相手を殺すか）という〈カルネアデスの板〉の問題となっているように思えます。

□より厳密に言うならば、〈カルネアデスの板〉とはある個人的主体ともう一つの個人的主体との間で問題にされることが主流かと思えますが、「鏡」に照らし合わせて考えるならば、個人の内部においても互いに譲れない信念・信条を孕んだ「存在」が存在し、自己の内部においても〈カルネアデスの板〉の問題を抱えているということになるかと思えます。

□今まで見てきたような、そのような状態である人間が果たして、本当に幸せに生きられるのかと言えば、答えはNOでしょう。実際、僕は鏡を用いて髭を剃れないくらい毎日恐怖に怯えて暮らす生活が十数年続いています。

□もっとも鏡に怯える状態による不幸は表層に過ぎないかと思えます。問題は実は 18、19 の時に鏡が出現する前からあったと考えられるからです。

□どういうことかと言えば、僕は鏡が出現する以前から、時代の波に流されて生きるような人間でした。また、この世界に不思議なものなどないと考えよう人間でもあったはずです。実はそのこと自体が僕にとっては僕の人生を豊かにすることを妨げるものであったと思われまます。

□そうした僕における非本来的な事態にあって、その限度を超えた時、僕の中にありながら僕の意識にあらざるもの（「僕以外の僕」）が、意識の僕に忠告してくれるような形で夜中に現れてきてくれた、というところが本当のことかと思えます。

□本来であれば、僕はその忠告を受け入れる形でそれまでの自己が壊れ、時代の波に呑まれない、そして不思議なものを受け入れられるような自己へと変貌していれば、彼の人生は人生の早い時点でより豊かなものになっていたはずでしょう。

□だからこそ、「僕以外の僕」が僕を激しく憎み、恐怖を覚えるようなやり方で出てきてくれたのは、それくらいしなければ彼が本当の意味で自己が壊れてはくれなかったからだろうと思えます。結果としてはそこまでしても僕は変わらなかったのですが。

□この作品は、そうした問題を反面教師的に伝えてくれているものだと思います。

□また、もし彼が今後救われるためには、この問題に気づくこと、具体的にはまず自己の恐怖と向き合い、18,19 歳の頃の自分に何が起こったのかと向き合うと共に、その恐怖を恐怖としているものとは何か、自己及び自己の無意識と向き合う必要があるかと思えます。

□もし、そのことが可能となり、自己が壊れ、「僕」が不思議なものを受け入れるような「僕」、時代の波に呑まれない「僕」になる、すなわち、「僕」が実質的に「僕以外の僕」になった時、僕にとっての新たな豊かな生がもたらされることになるのではないかと考えます。

「温かみを醸し出す小説」(村上春樹)

「温かみを寄せ合わせること」(「壁と卵」)(村上春樹)

「いかにして生存するがもっともよきかの問題に対して与えたる答案」(「文芸の哲学的基礎」)(夏目漱石)